

凜として

このところ、年齢がかさんできたせいでしょうか、他人様から直接叱られるということがなくなってきました。勿論、叱られるような悪いことをしているわけではありませんが、かといって、特別私が立派な人間になった訳ではありませんから、叱ってくれる人がいなくなるのは、寂しいことだと思っています。

そんな中、私は、自分の脳天を「がつん」とされるような一文に出会いました。

教育長を辞め、仕事にも一区切りついたような気分の一方では、振り返ってみれば何となく流れに乗って生きてきたのじゃないか、なおやり残したことがあるのじゃないか、というような思いに囚われていた頃のことです。そんな、ざわついた心の空白に、その言葉は津波のように飛び込んできました。

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて

(中略)

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄
自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

これは、茨木のり子さんの詩「自分の感受性くらい」の一節です。

茨木のり子さんは、1926年大阪に生まれ、青春時代を戦中・戦後の混乱

の中で生きなければなりませんでした。彼女は、「わたしが一番きれいだったとき」という詩の中で、

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

とっています。理不尽な戦争や、虐げられた青春を生きなければならなかったことへの、彼女の怒りを感じます。同時に、戦争に負けて卑屈になっている町、背中を丸めた大人達の群れの中を腕まくりして闊歩している強靱で、逞しい姿が目につかびます。

彼女の詩には、明確なメッセージ性があると思います。それは、凜とした彼女の生き方そのもののようにも感じます。

わたしの人生は、振り返ればそれなりに波乱があり、面白かったと思うと同時に、どこかで帳尻合わせをしいる自分を感じてもしました。還暦を優に過ぎてしまった今となっては、「まあ、こんなモンじゃないの」と、自分の人生を値踏みする声が聞こえてきそうです。

そういう私の心を見透かすように、彼女は

初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもがひよわな志にすぎなかった

という強い言葉を投げかけてきます。

残された人生に限りを感じる今だからこそ、世の中に迎合せず、初心を紡いで生きていこう、私は彼女の言葉を受け止めながら、改めて思っているところです。（塾頭 吉田 洋一）